# 普段着のわたしたち

姪が１月 14 日に成人式を迎えました。昨年の「はれのひ事件」の騒動の影響で、今年は母親の振袖を着るという「ママ振」現象が起きたとか。

ちなみにこの振袖は私のもの。帯と帯上げは私の母が成人式の時に締めた半世紀前のもの。姪からすれば「おば振」「ばば帯」となるわけです。

伯母も嬉しい、婆も嬉しい。引き継いで着てもらえて、着物たちもきっと嬉しい。古臭い！と言わずに来てくれた姪はとても良い子。どなたか見染めていただけたら、よろしくお願い申します。　訶梨帝母

友人に忘年会に誘われて、行った先がなんとダチョウ料理のお店でした。

ダチョウは赤身肉で脂肪分が少なくヘルシーとのこと。味は鶏肉というより牛肉に近かったです。特にレバーが大変美味でした。　征阿

『友引町内会通信』はパソコンやタブレットでもお読みいただけます。検索は http://www.daigoji-temple.jp/ 「友引町内会通信」をクリックしてください。寺務局

炊事をしている私の荒れた手を見かねて、何年か前の冬に訶梨帝母さんがハンドクリームとマツコデラックスさん御愛用の爪がピカピカになるヤスリを進呈してくださいました。それから我が身の内も外も懸命に磨きました。すると何日かして外出先でマツコデラックスさんに似た人が私の隣に座って来ました。そして太くて甘い声で、「女の子の手みたい」と耳元で囁きました。一瞬背筋が凍りましたが、間もなくしてとてもうれしく幸福感でいっぱいになりました。それ以来　…

先日久々に訶梨帝母さんにお会いしました。「どう責任取ってくれるのですか！」とあの時のお礼を申しあげました。余談ですが、訶梨帝母さんはお箏とお三味線のお師匠さんでもあり、着物姿がとても美しくもあり「粋」な方です。　俊徳丸

１月にフォルクハルト・シュトイデ氏のコンサートへ行きました。ウィーン・フィルのコンサートマスターですから弾くヴァイオリンも 1718 年製のストラディヴァリウス。オーストリア国立銀行から貸与されているもの。モーツアルト、ベートーヴェン、ブラームスなどを堪能させてもらい、幸せな気分にひたった夕べでした。　迷走坊

正月、まったり過ごしている中、テレビの特番で、芸人さんが「電動バイクで山口県錦帯橋から大分県宇佐神宮へ旅をする」というのがありました。宇佐神宮は私がかねてより行ってみたいと思う場所の一つ。二時間ほどの番組を見続けたのですが、肝心の宇佐神宮に到着し、拝殿でお参りするシーンは最後に三十秒あったかどうか。

私の二時間を返せ～！

さておき、何故宇佐神宮に行きたいか。

ある歴史本が、八幡総本社宇佐神宮が邪馬台国女王卑弥呼の墓ではないか、と仮説を立てています。

謎その①　八幡様（応神天皇）を一之御殿、二之御殿に比売（ひめ）大神、三之御殿に神功皇后（じんぐうこうごう）（応神天皇の母）。しかし、拝殿中心には比売大神。そしてこの神様、素性がいささかあやふや。八幡様よりその御母より上に祀られている貴女様は誰？

謎その②　称徳天皇（女帝で在位764～770年）が、寵愛する怪僧弓削道鏡（ゆげのどうきょう）に天皇の位を譲りたいと言い出し、ご神託を得るため和気清麻呂（わけのきよまろ）を宇佐神宮に派遣。すると「我が国は開闢以来万世一系。天皇家の血筋でないものを天皇にしてはいけません」とのご神託を持ち帰ったので、逆に怒りを買い、清麻呂は別部穢麻呂（わけべのきたなまろ）と改名されて流罪に

## こもりうた㊾

（あまりにも分かりやすい怒りの表現で笑えます）。そもそも、何故伊勢神宮のご神託じゃなく宇佐へお尋ねに行ったの？　伊勢神宮は普段からお参りする佛壇の様なもの、宇佐神宮は廟（墓）とするならば、ここ一番大切な相談、報告は墓参りに行くという事だったのでは？

じゃあそれは誰の墓？

その他謎はいくつもあり、万世一系でなかろう事柄、九州王朝東遷説、神功皇后不倫疑惑、天皇陵には学術調査が入れない、宮内庁が許可したら邪馬台国の謎など一気に解けるに違いない・・・などなど興味深い仮説が盛りだくさん。ぜひとも宇佐神宮拝殿前に立ち、体感したいと思っているのです。

ご興味が湧いた方は、井沢元彦著『逆説の日本史①古代黎明編』と高木彬光著『邪馬台国の秘密』をお読みください。

ちなみに、この宇佐神宮と島根県出雲大社。日本全国神社は多けれど、この二社だけの拝礼作法が二礼・四柏手・一拝。四柏手って何？

出雲（大国主神（おおくにぬしのみこと））と宇佐（卑弥呼）の共通点はいかに！これらの謎解きもイトヲカシ。

さらに、「邪馬台国が岩手県とすれば、これまで学者を悩ませ続けた『魏志倭人伝』の問題点が解決される」という話もお気に入り。こちらは鯨統一郎著『邪馬台国はどこですか？』。軽妙なタッチで読みやすし。

訶梨帝母

# お骨が奪われた！

NHK の大河ドラマ『いだてん』が始まりました。明治時代には、韋駄天や韋駄天走りの意味を誰もが知っていたのですね。

韋駄天さまは、元々バラモン教の神スカンダが佛教に取り入れられて佛法の護法神となったもので、四天王に従う天部の佛神です。唐風の甲冑をまとい剣或いは輪棒（宝棒）を持つ若い武将の姿で表されます。

捷疾鬼という足の速い鬼がお釈迦さまのお骨（佛舎利）を奪って逃げた時、追いかけて取り戻した。そこから、速く走る神、転じて、足の速い人の例えにされた訳です。

逃げた捷疾鬼（速疾鬼）の方は、「涅槃図」に異形の怪物として描かれています。お釈迦さまが入滅された 2 月 15 日にご遺徳を偲んで営まれる「涅槃会」でご確認いただけます。

古代インドの神話に出てくる鬼神ラークシャサのことで、羅刹と異称されます。自然界に棲み人を惑わし喰らい、空を飛び地を駆けること極めて敏捷な畏るべき精霊。男の容姿が醜悪で狂暴であるのに対し、女は美しく人の精気を奪うとか。（女の方が怖いなぁ）

では、なぜ捷疾鬼はお釈迦さまのお骨を盗んだのでしょうか？

答は、能「舎利」の中で語られています。

旅の僧が京都泉涌寺を訪れ、佛舎利を拝んでいると、一人の男が現れます。僧と一緒に舎利を拝み、釈迦在世の跡を追慕していると、にわかに男は鬼の姿となり、舎利を奪って虚空へと逃げてしまいます。実はこの男こそ、釈迦入滅の折にその遺骨を奪って逃げた、足疾鬼の執心だったのです。

驚いた泉涌寺の僧が祈ると、応じて現れた韋駄天は、逃げゆく足疾鬼を天高くまで追い廻し、下界に追い詰めて、舎利を取り戻して立ち去ります。力尽きた速疾鬼は茫然と起き上がり、逃げ去るのでした。

（そう言えば、アイドルへの渇愛が高じて、家で待ち伏せして傷つけたストーカーが）

こうして韋駄天さまは修行を妨げる魔物を走って捕まえたところから、盗難・火難除け、身体健全（特に足腰）にご利益があるとされ、伽藍の守護神として祀られているのです。

また、お釈迦さまのために駆け巡って食料を集めていたとされることから「ご馳走」の由来となり、禅宗寺院ではよく厨房に祀られ「食」の守護として崇められています。

３年前、韋駄天像を修復し、建て替えた鐘楼門へ安置したところ、自転車乗りの人たちが足腰の祈願に来てくれるようになりました。試合の前に必勝祈願に来られる方がおられ、守り本尊にしていただけたようです。

合掌して一礼し、真言「オン・イダテイタ・モコテイタ・ソワカ）を称え、鐘を一打してお参りください。

迷走坊

# 着物について考えてみました

私の知っている料理屋の女将さんは、以前フランス旅行に「着物(和装)」で行ったそうです。飛行機はエコノミーです。直行便で 12 時間かかります。女将さんにとっては「苦」でもなく日常的なことの一部です。それどころか、ヨーロッパのような歴史のある国々では、宿泊先のホテルへ自国の民族衣装で訪れた人はチェックイン時に頼んでもないのに 1 ランク上の部屋、もしくは景色の良い部屋に変更してくれるそうです。もちろんサービスです。レストランを訪れても同様のサービスを受けるそうです。民族衣装は国旗と同じで「敬意」を持たなければならないと言うのが「大人の国」の振る舞いのようです。安倍晋三総理も、次回サミット等へお出かけの際は是非「紋付羽織袴」の出で立ちで政府専用機からタラップを降り、各国の要人と交渉してくださることをお勧めいたします。強面のプーチンにも負けないと思います。

話は変わり、私のお寺の本堂が全部椅子席に代わったのが 30 年程前です。当時、膝が痛くて正座、もしくは畳に座っていることが困難になった人が急に増えたからです。

日本人の生活スタイルが西洋化したと言いつつ 100%そうなった訳ではありません。完全に椅子の生活ではありません。家に帰りリラックスしてテレビを見る時など畳の上で寝ころがってゴロゴロしたりします。筋肉を完全に緩

めくつろぐ振る舞いは農耕民族を御先祖に持つ者の「性」だそうです。狩猟民族は獣に警戒してすぐ動けるよう腰掛けの生活で筋肉はいつも緊張しているそうです。そうしていると間もなくトイレに行きたくなります。その時立ち上がる今のあなたの姿を想像してみてください。両手をついて「どっこらしょ」と無造作に且つ横着に立ち上がると思います。これは洋服を着用しているから出来る所作であります。重力に逆らって立ち上がる動作によってお尻から上半身の全体

重が一気に膝にのしかかります。毎日の積み重ねで知らず知らずに大きなダメージになります。これが着物を着ていたとしたらどうでしょう。「よっこらしょ」の所作では裾がはじけてしまいます。同じように寝ころがっていたとしても、立ち上がる際はいちど座り直し正座をし、先ず両足の指を立てからゆっくり膝を上げていくことになります。着物が作る動作の制約によって膝が守られているのです。着物あっての畳の生活が存在するのです。そう言えば、着物で仕事している坊さんも膝で不自由している人が少ないこともうなずけます。

このように着物は先人の知恵がたっぷり詰まっています。お腹の三角地帯は二重になり冷やさず、帯は無意識に姿勢を整えてくれます。またモデルさんにも共通する美しい歩き方に導いてくれます。一年に一度は着る日があっても良いと思います。 俊徳丸

# 天に偽りなきものを

春もまだ浅いある日、三保の浦の松原で漁の帰りらしい白龍という漁夫があたりの美しい景色を眺めていると、まるで極楽であるかのように、空から花が降り、音楽が聞こえ、あたりにかぐわしい匂いが漂ってきます。ふと見ると、松に美しい衣が掛かっています。近づくと、色も香りもなんともいえず上品です。白龍は家の宝にと、手に取って帰ろうとします。

そこへ、天から来たものだという女が現われ、その衣は自分のもので、それがないと天に帰ることができない。どうか返してほしいと懇願します。せっかく手に入れた宝物、しかも天人のものだというのであれば国の宝にもしたい、白龍は返すことはできないといいます。

天人の嘆きようは尋常ではありません。髪飾りの花も萎れ、まさに天人の五衰を画に描いたような姿になっています。

さすがに労しく感じ、白龍は、聞き及ぶ天人の舞楽をいま見せてくれたら返してあげようと、条件を出します。返してもらえるなら天上に帰ることができると、天人はおおいに喜び、月の都で舞う曲があるのでそれをお見せしましょうと、その申し出を受け入れますが、実はその衣を身につけないと舞えない、まず返してくださいといいます。白龍は、「この衣を返したら、舞を見せないで、そのまま天に行ってしまうのではないか」と難色を示します。

表題「天に偽りなきものを」は、これに対して天人が返したことばで、能『羽衣』の中で交わされる、有名な問答の一節です。天の人は嘘はつかない、の意です。

**ワキ「いやこの衣を返しなば、舞曲をなさでそのままに、天にや上がり給ふべき」**

**シテ「いや疑ひは人間にあり、天に偽りなきものを」**

白龍は、天人のことばを疑ったことを深く恥じ、快く衣を返します。衣を身につけた天人は、自分が月の満ち欠けの仕事を受け持つ天少女の一人であることを告げ、ことばを違えず、それはそれは美しい舞を披露します。あたりは、さながら極楽世界かと思われる様相を呈します。

今年の元旦に、ＮＨＫは、能『羽衣』を放送しました。画面に見入っていた私は、上の引用の部分を耳にしたとき、ゆくりなくも、ああ、ここは人間世界、天とは違うのだ、と思いました。首相は知っていたのではないか、何らかの形で首相の意図が反映されたのではないかと、多くの人が疑った事例が、昨年、世間を騒がせました。「モリカケ」と、冗談めかして報道された、あの件を想起したのです。

改元の年を迎えたいま、疑いは、疑いの種をはらんだまま、うやむやのうちに、雲散霧消しようとしています。まるで、正直者の漁夫を恥じ入らせた「天に偽りなきものを」という天女のことばをあざ笑うかのように。

（散歩道）

# 『私説法然伝』（４９）

回心回天④

先月号では法然上人の人生において一番重要な出来事の一つである「回心」について書きました。今月号はその続きについて書きます。

【法然上人の人生は「回心」によって大きく変わった。それは日本の歴史を変えていくことでもあった。だが、それはまだ先の話である。

法然上人は約三十年という長い月日を過ごした比叡山を下りることにした。この一点からわかるのが、法然上人は回心によって大きく変わられた事は「事実」だということである。ただし、その時の法然上人の思いや考えがどのようなものであったのか、定かでない。本願念佛の教えを広く世に広めるためであったのか？それとも何か他の目的があったのであろうか？少なくとも何かの理由と意図があったには違いないのである。ただ念佛の日々を送るだけなら比叡山を下りる事はないはずである。山を下りるということは、比叡山延暦寺の僧侶として保証されている人生を捨てることになる。そうまでしてなぜ山を下りたのか？

まず思想的に師僧である叡空の下には居づらくなったのかもしれない。黒谷という比叡山の中でも隠遁の地であっても、法然上人はもう居場所が無くなってしまったのではないか？阿弥陀佛の本願によって救われる「他力」という思想の法然上人が、方法論の違いがあれども、いずれも「自力」の思想の世界であり、相反する思想の法然上人が居ることができなくなった、そう考えるのは不自然ではないだろう。ただし、それだけで山を下りるのも不自然でもある。

法然上人の回心は到達点でもあったが、出発点ともなった、と考えると、山を下りなければならないというよりも、山を下りたくなったのかもしれない。「他力」というのは何もしなくても救われる事でもあるが、それを自覚した時にはじめて開眼され始まる境地と状況がある。救われている真実への報恩感謝の念佛というものである。法然上人はその報恩感謝の念佛の第一歩として、山を下りる事にされたのかもしれない。籠山すること約三十年、回心と同じく承安五年法然上人は新たな一歩を踏み出される事になった。】

法然上人がついに比叡山延暦寺を下りられる事になりました。諸説ありますが、決して後ろ向きな理由だけはなく、前向きな理由があったことでしょう。そして大事な事は山を下りられた法然上人がどこへ向かわれたのか、ということです。

以下次号に続く（征阿）

比叡山から琵琶湖方面の眺め

# 観経物語（１２６）

正宗分（しょうじゅうぶん）その80

散善（さんぜん）下品下生その３

《本文》その３

観世音・大勢至は、大悲の音声を以て、其の為に諸法の実相と、罪を除滅するの法を広説す。聞き已わりて歓喜し、時に応じて即ち菩提の心を発す。是れを下品下生の者と名づく。

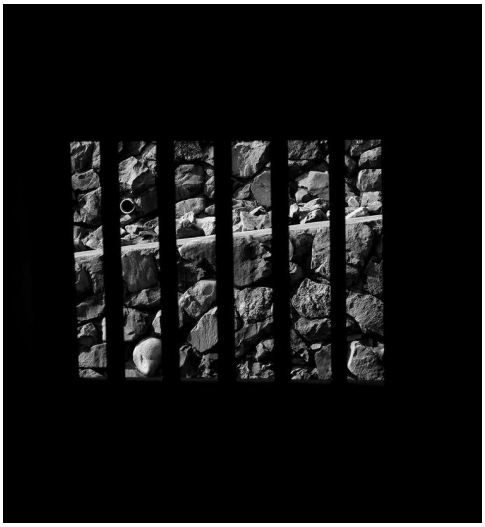
是れを、下輩の生まるるの想と名づけ、第十六観と名づく。

《意味・訳文》

（その時そこで）観世音菩薩と大勢至菩薩とが、大慈悲の心を込めた声をあげて、その（往生）人のために、諸法（＝もろもろの現象の世界）の実相（＝実相すなわち現象の背景に有る本質と真実のすがた）と、その往生人が犯した罪を消滅せしめるための法（＝方法）を、広説（＝広く詳しく説き明かす）する。往生人は、聞き終わって歓喜の心を起こし、すぐさま、さとりを求めようとする心を起こすようになるであろう。これを下品下生の者と名づける。

以上を下品という等級に生まれた者についての観想と名づけ、第十六観と名づけるのである。

《私訳》

これまでの下品上生から下品下生までの下三品・下輩の人は、悪人・寓人であって善行を為さない人でありながら、なぜ「散善の機」と分類のでしょうか。この前に説かれた定善の十三観は、韋提希が請（＝願い求めた）した「思惟正受」という善行に対する釈尊のお答えとしての「観法」でしたから「定善」と名づけられました。そして以下の第十四上輩観からこの場面の第十六下輩観までは、極楽に往生しようとする者の行いに、上・中・下輩の三種類があり、それが各輩がさらに上・中・下に分けられた、都合九品の往生の仕方（相当する行いや有り様）があり、人があると説明されました。結局全ての人が往生できるという結論だけであったならば「散善」と名づける必要があったのでしょうか。考えられる答えは、序分のところで韋提希が請した「思惟正受」の「定善行」の以前に、釈尊が、散善の修行として「三福行」を説かれたことを（＝序分の散善顕行縁）を思い出しましょう。この序分の三福と、ここ下輩の三福との繰り返しに気がつくでしょう。この序分の三福は浄土の正しき因となる（正因）と釈尊は言われました。そして、ここ下輩の三福は、浄土の正しき行となる（正行）なので九品とも正行であるから、定善でもなく悪でもなく、散善と呼ぶのです。

《妙星斎》